平和之礎

連日の厳しい暑さが続き、太平洋戦争の終結から62年目の夏が訪れようとしている。今回は、終戦間際の昭和20年６月に白山町上空で起きた出来事をご紹介しよう。

昭和20年６月26日、白山町上空で日本の戦闘機「飛燕（ひえん）」が、日本本土の爆撃に飛来したアメリカのB29に体当たりした。飛燕の乗員は広島県出身で当時24歳。岐阜県各務原市の飛行場を空襲するためグアムから飛来したB29に突っ込んだ。

現場は、白山町大三地区の上空で、B29は白山町倭地区の東青山四季のさと付近に墜落した。飛燕の乗員は空中で放出され、パラシュートによって久居まで流されたが、すでに亡くなっていた。

一方B29には11人が搭乗しており、うち10人は墜落時に死亡した。パラシュートで降下した１人が助かり、警察官に連れられて榊原の陸軍病院で手当を受け、名古屋の東海軍管区司令部に送られたという。

このときの飛燕とB29の破片は白山郷土資料館に寄託され、関係資料とともに保管されている。

白山町大三地区の白山台団地の一角には、昭和43年に築かれた「平和之礎」がある。これは、墜落当時白山町大三地区の人たちが散乱した飛燕の破片を拾い集め、供養したものがもととなっている。今も献花・清掃が続けられており、この事件を後世に記録し、永遠の平和を願う祈念碑となっている。

（「広報津」平成19年８月１日号）

白山台に建つ平和之礎